

アフリカと「アフリカの独立」に関する報道と理解(5)

川 端 正 久

14 1958年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

1月6日 アジア・アフリカ諸国民会議に出席した日本の労働組合代表吉村博行はエジプトの労働組合代表カメルとの共同宣言に署名した(朝)。1月8日 佐藤巧二特派員(カイロ)報告「ナセル大統領と会う 外務省文化使節 楠山義太郎氏」(毎)。1月16日 日本経済調査団(団長=高碇達之助前経済企画庁長官)はカイロに到着した(朝)。1月18日 日本経済調査団はナセル大統領と会見した(朝)。1月29日 牟田口特派員(アスワン)報告「新アスワン・ダムを語る 現地で日本経済使節団の座談会」(朝)。「人寸描 関根吉郎」(朝)。2月1日 日本経済調査団はシドキ産業相と会談した(朝)。2月5日 高碇達之助団長は赤城農相を訪問しエジプト政府が漁業協力について希望していることを報告した(毎)。2月19日 日本政府はエジプトに対する貿易債権こげつきによりエジプト向け輸出停止を決定すると伝えられた(朝)。2月20日 日本政府は対エジプト輸出超過代金の回収のため綿花・米輸入で決済するように土田豊大使に訓令した(朝)。松平康東国連大使はエジプト・スーダン問題で解決案を提案したが双方から拒否された(朝)。2月21日 松平康東国連大使は現状維持のまま交渉をするよう演説した(朝・毎)。2月24日 日本政府は統一アラブ共和

国を承認した（朝）。4月1日 日本とエチオピアは公使館を大使館に昇格した（毎）。4月10日 日本とエチオピアは友好条約の批准書を交換した（毎）。6月8日 今西錦司・伊谷純一郎「猛然襲うゴリラ 恐怖の終幕 アフリカ探検」（毎）。6月11日 解説「輸出 八方ふさがりの形勢 関税を三―四倍に 東アフリカ三国 日本繊維品に打撃」（毎）。6月13日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「日本との協力望む 公館長会議の大公使と会見 ナセル大統領語る」（毎）。7月12日 アルジェリア民族解放戦線（FLN）は極東代表部を東京に設置すると決定した（朝・毎）。9月11日 太田一郎駐伊大使はチュニジア駐在公使としての信任状をブルギバ大統領に提出した（朝）。9月30日 ガーナのグベデマ蔵相は来日した（朝）。10月1日 グベデマ蔵相は外交団を交換したいと語った（毎）。10月17日 ガーナ代表はガット総会で日本に対するガット規約35条の援用を廃止しないと声明した（朝・毎）。11月1日 日本農業使節団（団長＝東畑精一移動大使）はカイロに到着した（朝・毎）。11月8日 日本とエジプトは支払協定に調印した（朝）。11月14日 日本政府はギニア共和国を承認した（朝）。11月26日 日本政府はスーダン新政府を承認した（毎）。

アフリカと世界

1月1日 アジア・アフリカ諸国民会議は終了した。アジア・アフリカ連帯委員会を設置し常設事務局をカイロに設置することになった（朝）。2月6日 解説「世界の鼓動（50）サハラ開発とフランス」（朝）。2月13日 森欧州総局長（ロンドン）報告「アフリカの人種的対立」（朝）。4月15日 アフリカ諸国会議はガーナのアクラで開催された（朝・毎）。参加国はガーナ、アラブ連合、エチオピア、リベリア、リビア、モロッコ、スーダン、チュニジアの八カ国。エンクルマを議長に選出した（朝）。20日に北アフリカの紛争停止を呼びかけアルジェリアを支援する決議を、21日に南アフリカの人種差別を取り除く決議を採択した（朝・毎）。22日に宣言を採択して閉会した（朝・毎）。4月24日 解説「独立闘争へ強い刺激 成功

だったアフリカ会議」（朝）。4月27日 北アフリカ民族（主義者）会議はモロッコのタンジールで開催された。モロッコのイスチクル党、チュニジアのネオ・デストゥール党、アルジェリアの民族解放戦線（FNL）が出席した（朝）。29日に独立アルジェリア政府の結成を勧告した（朝）。30日にアルジェリア人の主権と独立の権利を宣言する決議を採択した（朝）。会議は「北アフリカ評議会（協議会）」設立を決議した（毎）。4月27日 角田特派員（パリ）報告「きょう北ア民族会議開く アルジェリア討議がヤマ」（毎）。4月29日 国連経済社会理事会はアフリカ経済委員会の設立を決定した（朝・毎）。5月2日 アフリカ経済委員会の本部の場所としてアジスアベバが選ばれた（朝）。6月12日 エンクルマ首相はチュニジアを訪問しアルジェリア援助の共同声明を発表した（朝）。6月15日 エンクルマ首相はアフリカ共同防衛条約の締結を提唱した（毎）。6月16日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「ナセル・エンクルマ会談始る アフリカと中東の民族運動一本化へ」（毎）。6月20日 チュニスで開催された北アフリカ指導者会議はフランスのアルジェリア統合案を拒否し「北アフリカ諮問会議」の設置を発表した（毎）。8月31日 小島特派員（パリ）報告「一応、目的を果す ド首相のアフリカ訪問」（朝）。9月10日 アジア・アフリカ・グループはアルジェリアの国民投票方式に反対した（朝）。9月19日 タンガニカのムワンザで開催された東アフリカ民族（主義者）会議は「汎アフリカ自由運動」を結成した（毎）。9月27日 解説「仏新憲法あす国民投票」（朝）。9月28日 フランスの新憲法は成立した（朝・毎）。11月23日 全アフリカ諸国民会議が12月にアクラで開催され「アフリカ合衆国」創設について議論するとカイロで伝えられた（朝・毎）。12月4日 アジア・アフリカ・グループ28カ国はギニアの国連加盟を支持した（朝）。12月5日 ソ連のフルシチョフ首相はアフリカの民族独立を支持すると全アフリカ諸国民会議議長に電報を送った（朝）。12月7日 解説「全アフリカ会議の意義 民族独立へ意気結集」（朝）。12月8日 全アフリカ諸国民会議はアク

ラで開催された（朝・毎）。13日に全アフリカ諸国民会議は植民地主義反対を決議し「常設書記局」をアクラに設置することを決定し終了した（朝・毎）。12月12日 ハマーショルド国連事務総長はソマリランドとエチオピアの国境画定問題で調停援助を申し入れた（朝）。12月29日 国連アフリカ経済委員会が開催されハマーショルド事務総長は演説で経済同盟の設立を促した（朝・毎）。12月30日 西アフリカ4カ国の指導者はバマコ会議で経済連合結成を決定した（朝）。

北アフリカ

エジプト

1月29日 ソ連・エジプト経済技術協力協定は調印された（毎）。2月1日 エジプトとシリアは合邦を宣言し「アラブ連合共和国」が誕生した（朝・毎）。2月4日 解説（松原敏朗）「「統一アラブ共和国」の誕生」（毎）。

リビア

7月19日 英国国防省はクーデター予防措置としてリビア上陸を命令した（朝・毎）。7月23日 英軍はリビアに上陸した（毎）。9月17日 リビアは国際通貨基金と世界銀行に加盟した（毎）。9月29日 リビア政府は仏軍機が国境を銃撃したと発表した（朝）。

チュニジア

2月8日 仏空軍機はチュニジアの村を爆撃した（朝・毎）。ブルギバ大統領は仏軍撤退を要求した（毎）。2月9日 チュニジア政府はフランスの武力侵略に抗議する書簡を国連事務総長に送った（朝・毎）。2月11日 チュニジア政府はフランスの5領事館を閉鎖した（朝・毎）。チュニジア政府は爆撃事件を国連に提訴した（朝・毎）。2月12日 チュニジア政府は仏軍の移動禁止通告を訓令した（朝）。2月13日 チュニジア政府は村落爆撃問題を討議するために国連安保理の開催を要求した（朝・毎）。2月14日 チュニスで反仏デモが行われた（朝）。3月7日 ブルギバ大統領は仏軍の撤退を要求した（朝）。4月3日 フランス政府はチュニジア調停案を拒否（龍法 '19） 52-3, 184 (846)

した（朝・毎）。4月13日 解説（三好修）「首脳会談へ“先手争い” チュニジア問題振出しへ」（毎）。4月14日 チュニジアは世界銀行と国際通貨基金に加盟した（朝・毎）。5月19日 アルジェリア駐在仏軍がチュニジアに越境攻撃した（朝・毎）。5月25日 ブルギバ大統領は全土に非常事態を宣言した（朝・毎）。5月26日 ブルギバ大統領はアルジェリア問題で国連安保理に提訴した（朝・毎）。5月30日 仏軍とチュニジア軍が交戦した（朝）。5月31日 チュニジア軍は仏軍機に発砲した（朝）。6月2日 国連安保理（フランス・チュニジア紛争）が開催された（朝・毎）。6月5日 仏軍はチュニジア基地を攻撃した（朝）。6月17日 チュニジアとフランスは仏軍撤退の調停に調印した（朝）。9月8日 チュニジア政府はアラブ連盟への加盟を決定した（毎）。9月26日 チュニジアと中国は貿易協定に調印した（朝）。10月15日 チュニジア政府はアラブ連合と断交した（朝・毎）。10月17日 チュニジア政府はカイロの大使館を閉鎖した（朝）。10月18日 佐藤特派員（カイロ）報告「断交で窮地に立つ チュニジア ア連合に強い不信」（毎）。11月5日 仏軍はチュニジアに侵入した（朝・毎）。

モロッコ

2月19日 モハメッド五世はスペイン保護領南モロッコ（タルファヤ）の合併を表明した（朝・毎）。4月16日 シ・ベッカイ首相の内閣は解任された（朝・毎）。5月8日 モハメッド国王はイスチクル党書記長のバラフレジ外相を首相に任命した（朝）。5月12日 アーメッド・バラフレジ首相は内閣を組織した（朝・毎）。6月14日 モロッコ南東部から仏軍が撤退した（朝）。8月4日 バラフレジ首相は全外国軍隊の撤退を希望すると述べた（朝）。9月8日 モロッコとソ連は大使交換を発表した（朝）。11月18日 モハメッド国王は外国軍の全面撤退を要求した（毎）。11月25日 バラフレジ首相はモハメッド国王に辞表を提出した（朝）。12月23日 アブダラ・イブラヒムを首班とする内閣が成立した（毎）。

[アルジェリア]

1月9日 サハラ石油の輸送が開始された（朝）。1月28日 フランス国民議会は修正アルジェリア基本法を可決した（朝・毎）。2月10日 解説（片岡忠敏）「チュニジアも巻ぞえ アルジェリアの争い」（毎）。2月15日 チュニジア国境付近で仏軍との戦闘が発生した（朝・毎）。2月21日 アルジェリア反仏部隊はフランス軍を攻撃した（朝・毎）。2月27日 仏軍部隊は反乱軍と交戦した（毎）。3月18日 小島特派員（パリ）報告「どろ沼のアルジェリア問題 上」（朝）；「下」3月19日。3月23日 アルジェ地区で戦闘があった（朝）。3月30日 仏軍と反乱軍の衝突があった（朝）。5月13日 フランス人のデモ隊（右翼過激派）は政庁を占拠し降下隊と治安委を作った（朝・毎）。5月14日 フランス政府はアルジェリア駐留軍総司令官サラン将軍に全権を付与し暴動鎮圧を命令した（朝・毎）。フランス人のデモ隊はオランの放送局を占拠した（朝・毎）。5月15日 解説（松原俊郎）「火がついたアルジェリア問題」（毎）。5月17日 角田明特派員（パリ）報告「「アルジェリア」の背景 コロン（欧州系住民）の強い執念」（毎）。5月19日 アルジェ公共治安委員会スポークスマンはアルジェリア全土に公共治安委員会を設置すると発表した（朝）。5月22日 解説「第四共和制最大の難関 仏のアルジェリア戦争」（朝）。5月24日 解説「アルジェリアというところ」（毎）。5月25日 サラン総司令官はドゴール政府の樹立を要請した（朝）。ドゴール擁立運動は仏領西アフリカ・赤道アフリカに拡大した（朝・毎）。5月27日 ドゴール将軍は組閣工作を開始した（朝）。5月31日 ドゴール政権が成立した（朝）。サラン総司令官は全土に軍政を指令した（朝）。解説（林三郎）「フランス政変の前途」（毎）。6月3日 ドゴール首相はアルジェに到着した（朝・毎）。6月4日「風雲のアルジェリアを見る 星野芳樹氏にきく（上）」（朝）；（下）6月5日。6月5日 ドゴール首相は三ヵ月以内に全住民選挙を実施すると演説した（朝・毎）。民族解放戦線（FNL）はドゴール声明を拒否した（朝・毎）。6月8日 小島特派員（アルジェリア）報告「ドゴール旅行に随行して 暗いアルジェ（龍法 '19）52-3, 186（848）」

リア説得」（朝）。6月9日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「“独立以外にない” 解放戦線のドゴール提案拒否」（毎）。6月21日 民族解放戦線（FNL）は近く独立政府樹立を宣言すると発表した（朝）。6月24日 民族解放戦線（FNL）は臨時政府の閣僚を発表した（朝・毎）。6月25日 全土で民族主義運動が行われた（朝）。6月29日 角田明特派員（アルジェ）報告「「親西欧」か「中立」か アルジェリア臨時政府の設立」（毎）。7月1日 ドゴール首相はアルジェリアに入りチュニジア国境を視察した（朝・毎）。7月2日 ドゴール首相はモロッコ国境を視察した（朝）。7月3日 角田明特派員（アルジェ）報告「紛争地点をさぐる アルジェリア」（毎）。7月12日 角田特派員（パリ）報告「行悩むアルジェリア政策 仏首相近く三度訪問」（毎）。9月19日 民族解放戦線（FNL）はアルジェリア共和国臨時政府の樹立を宣言した。首相はアバス（朝・毎）。アラブ連合、リビア、イラク、チュニジア、モロッコなどが承認した（朝）。9月20日 角田特派員（パリ）報告「「統合」か「自由」か 国民投票控え混乱のアルジェリア」（毎）。9月21日 牟田口特派員（カイロ）報告「興奮するアバス首相 記念の国旗かけ記者会見 アルジェリアの宣言」（朝）。佐藤特派員（カイロ）報告「民族運動に拍車 アラブ諸国続々と承認」（毎）。社説「アルジェリアの新情勢」（毎）。9月26日 アバス首相はフランスとの平和交渉を呼びかけた（朝）。9月27日 角田特派員（パリ）報告「仏新憲法国民投票 望めぬ根本解決」（毎）。9月29日 角田特派員（アルジェ）報告「風雲のアルジェリアを見る」（毎）。10月3日 ドゴール首相はアルジェリア改革五カ年計画を提案した（朝・毎）。10月6日 臨時政府はドゴール首相の提案を拒否すると声明した（朝）。10月9日 臨時政府は大赦を声明した（朝）。10月20日 角田特派員（パリ）報告「分裂した右翼に追打ち」（毎）。10月21日 アバス首相はフランスと停戦の話し合いの用意があると述べた（朝・毎）。10月25日 臨時政府はドゴール首相の休戦交渉提案を拒否した（朝・毎）。11月25日 フランス国民議会議員選挙

がアルジェリアで開始された（朝）。12月3日 ドゴール首相はアルジェリアに到着した（朝・毎）。

〔西領サハラ〕

3月17日 スペイン政府はスペイン領サハラ領域にスペイン人三万人を入植させる計画であると伝えられた（朝）。

西アフリカ

ガーナ

1月14日 ガーナとソ連は外交関係を開くことで意見が一致したと発表された（朝）。3月8日 エンクルマ首相はアイゼンハワー米国大統領からの米国招待を受諾した（朝）。11月10日 ガーナ政府は首相暗殺計画に参加した43人に逮捕を命じた（朝）。11月23日 エンクルマ・ガーナ首相とトーレ・ギニア首相はガーナ・ギニア連邦結成協定に調印した（朝・毎）。12月12日 ガーナ議会はガーナとギニアの合邦を承認した（朝）。12月20日 野党幹部は首相暗殺計画で逮捕された（朝）。

〔ナイジェリア〕

8月5日 ナイジェリア連邦政府は1960年4月2日に英国から独立することを決定した（朝）。10月25日 レノックスボイド英国植民地相はナイジェリアに対し1960年10月1日に独立させることを約束した（朝・毎）。

〔仏領西アフリカ〕

〔仏領ギニア〕

9月29日 国民投票（9月28日）は反対が圧倒的であると伝えられた（朝・毎）。フランス政府はギニアが他の仏領アフリカから分離されたとギニア首相に通告した（毎）。リストリッシュ駐ギニア仏弁務官はギニアが10月1日に独立すると言明した（毎）。10月1日 ガーナはギニアの独立を承認した（毎）。10月2日 ギニア地方議会は独立を宣言した（朝・毎）。10月3日 アラブ連合はギニアの独立を承認した（朝・毎）。角田特派員（パリ）報告「“意外の独立”拾ったギニア」（毎）。10月4日 ソ連はギニア（龍法 '19）52-3, 188（850）

を承認した（朝・毎）。解説「クローズ・アップ ギニアの初代首相 セクー・トーレ」（朝）。10月7日 中国はギニアを承認した（朝・毎）。10月8日 解説「プロフィール ギニア共和国の初代首相 セクー・トーレ」（毎）。11月12日 ギニア国民議会は新憲法を採択した（朝）。12月9日 国連安保理はギニアの加盟を可決した（朝・毎）。12月12日 国連総会はギニアの加盟を承認した（朝・毎）。

〔仏領トーゴランド〕

4月27日 総選挙が行われ即時完全独立を要求する野党の統一党が勝利した（朝・毎）。10月2日 フランス政府は仏領トーゴランドが1960年に独立することに同意した（朝）。10月17日 国連信託統治理事会は仏領トーゴランドに対して1960年に独立を与えるとの決議を承認した（朝）。11月14日 国連総会は仏領トーゴランドの独立を可決した（朝）。

〔仏領スーダン〕

11月24日 スーダン地方議会はフランス共同体内での独立を宣言した（朝・毎）。

〔仏領セネガル〕

11月25日 セネガル議会はフランス共同体内での独立を決定した（朝・毎）。

〔仏領モーリタニア〕

3月14日 モロッコの民族主義指導者アブデル・クリムはフランス・スペイン合同軍が仏領モーリタニアで六百人を殺害したがモーリタニア人は独立を認められるまで戦いをやめないとカイロで述べた（朝）。11月28日 モーリタニア議会はフランス共同体内での独立を決定した（毎）。

〔仏領象牙海岸〕

12月4日 象牙海岸議会はフランス共同体内での独立を決定した（朝・毎）。

〔仏領ダホメ〕

12月4日　ダホメはフランス共同体内での独立を宣言した（朝・毎）。

[仏領オート・ボルタ]

12月11日　オート・ボルタ地方議会はフランス共同体内での独立を可決した（朝）。

[仏領ニジェール]

12月18日　ニジェールは共和国を宣言した（ただし記事はない）。

中部アフリカ

[仏領赤道アフリカ]

[仏領カメルーン]

2月16日　政変が発生しムビダ首相は辞任した（朝）。[仏領カメルーンは1957年5月に自治を付与されムビダ首相が就任した（ただし記事はない）]。

[仏領コンゴ]

11月28日　コンゴ議会はフランス共同体内での独立を宣言した（毎）。

[仏領ガボン]

11月28日　ガボン地方議会はフランス共同体内での独立を宣言した（毎）。

[仏領チャド]

11月28日　チャドはフランス共同体内での独立を宣言した（ただし記事はない）。

[仏領ウバンギ・シャリ]

12月1日　ウバンギ・シャリ地方議会はフランス共同体内での独立を決定し「中央アフリカ共和国」となった（毎）。

東アフリカ

スーダン

2月17日　エジプトは領有を主張してスーダン北部に派兵した（朝・毎）。

2月18日　エジプトとスーダンの両外相は話し合いに入った（朝）。スーダ

ン政府閣議はエジプトの要求について検討した（朝）。2月19日 スーダン軍は行動を開始した（朝・毎）。2月20日 スーダン政府は国境問題を国連安保理に提訴した（朝）。2月21日 国連安保理は国境紛争を討議した（毎）。2月24日 エジプト政府はスーダン選挙後まで紛争解決を延期するとスーダン政府に通告した（毎）。2月25日 スーダン政府はエジプト軍がアブ・ラマドから撤退中であると発表した（朝・毎）。2月28日 総選挙が開始された（朝）。3月1日 スーダン政府はアラブ連合共和国を承認した（朝）。3月11日 総選挙の結果はカリル首相の与党ウンマ党の勝利であった（朝）。しかしウンマ党（親西欧派）は過半数を取れなかった（毎）。3月20日 ウンマ党のカリル書記長が首相に再選された（朝）。4月3日 米国・スーダン援助協定は調印された（朝）。4月6日 スーダン政府はソ連の援助を受け入れると決定した（毎）。7月20日 スーダン政府はアラブ連合大使館員に国外退去を要求した（毎）。11月17日 クーデターが発生しイブラヒム・アブード陸軍参謀長が実権を握った（朝・毎）。11月18日 アブード首相の内閣が成立した（朝）。「民主共和国」を布告した（毎）。武藤特派員（ロンドン）報告「英、スーダン新政権に好感」（毎）。11月30日 スーダン政府は基本政策を発表した（毎）。12月1日 中国はスーダンと外交関係を樹立した（朝）。

[英領ソマリランド]

8月28日 英領ソマリランドの各党派会議は独立を要求した（朝）。

[伊領ソマリランド]

12月5日 国連総会は1960年12月10日に独立する伊領ソマリランドに経済援助を要請する決議を可決した（朝）。

[仏領ソマリランド]

7月9日 フランス国民議会は仏領ソマリランドに自治権を与える法案を可決した（毎）。12月11日 仏領ソマリ（ランド）は表決（4対17）で独立を拒否した（朝）。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

3月17日 人種差別と人口登録法に抗議する在宅運動が組織された（朝）。
4月18日 総選挙の結果はス（ト）レイドム首相率いる国民党が圧勝した（朝）。9月2日 バーワード（フルヴールト）住民相が首相に選ばれた（朝・毎）。9月5日 国連南西アフリカ調査委員会は南ア連邦の組織的人種差別政策を非難した（朝）。11月6日 ヨハネスブルグ法廷はデモに参加した女性128人に実刑を言い渡した（朝）。

[南西アフリカ]

9月1日 国連三人委員会は南西アフリカの分割案（南アフリカ連邦編入と国連信託統治）を国連総会に提出した（朝）。

[仏領マダガスカル]

8月22日 ドゴール首相はマダガスカルに到着した（朝）。ドゴール首相は植民地は国民投票でフランス連合を離脱できると言明した（毎）。チラナナ首相は仏併合法の廃止を要求すると言明した（毎）。10月14日 マダガスカル州議会は共和国を宣言しフランス連合の一員にとどまることを決めた（朝・毎）。フランス共同体内での独立である。「マルガシュ共和国」となった（朝・毎）。

1-2 報道と解説

アフリカ諸国との外交関係に進展があった。日本とエチオピアは公使館を大使館に昇格した。「大使館に昇格 日本・エチオピア 日本とエチオピア両国は1日から相互の公使館をそれぞれ大使館に昇格することになった」（毎、4月2日）。ガーナのグベデマ蔵相は来日した。「ガーナの蔵相来日 アフリカの新興国ガーナのグベデマ蔵相は30日…来日した」（朝、10月1日）。日本政府はギニアを承認した。「ギニア共和国を承認 政府は14日の閣議で…ギニア共和国（西アフリカ）を承認することに決めた」（朝、（龍法 '19）52-3, 192（854）

11月14日）。日本経済調査（使節）団はエジプトを、日本農業使節団はエジプトとエチオピアを訪問した。

1958年の最大の出来事はフランス領アフリカの動向であった。ドゴール内閣は6月1日に成立した。ドゴール首相は海外領土（植民地）からなるフランス連合を自治国からなるフランス共同体に改編することを提唱した。ドゴール首相は8月にアフリカ諸国を訪問し、フランス共同体の形成を提案した新憲法への支持を訴えた。旅行の中頃までは順調であった。「仏首相、マダガスカルに到着 [タナナリブ（マダガスカル）22日発＝ロイター] ドゴール仏首相は21日マダガスカルに到着、22日議員、地方代表や群衆の熱烈な歓迎の中で「仏の新憲法は海外領土に、独立国になり、望むならば自分自身の道を歩む可能性を与えるものだ」と…語った」（朝、8月23日）。ドゴール首相はギニアで完全独立を求める大衆のデモに見舞われた。

第五共和制憲法についての国民投票が9月28日に実施された。完全な独立国を求める声は「ノン」、フランス共同体内での「独立」（自治）国を求める声は「ウイ」となった。「仏新憲法案あす国民投票 解説…海外植民地の再編成については、第四共和制の仏連合はなくなり、共同体が提案されている。共同体の中で海外領土原住民は、州、県、グループになることも、またこの憲法案に反対することで分離独立することも出来る。共同体の原則としては、州は自治権を持ち、市民権は一つで、権利義務は平等である。ただ外交、国防、通貨、経済財政政策は共同体一つの権限で、その機関として執行会議とセナ（上院）がある」（朝、9月27日）。

「ノン」が90%を超えたギニアは完全独立を達成した。ギニアは10月2日に独立を宣言した。「当然」か「意外」かは別にして、ギニアの前途に多難な道が横たわっていたことは確実である。「“意外の独立”拾ったギニア大衆にはピンと来ぬ [パリ1日角田特派員発] 36才のセクー・トーレ首相のもと98パーセントという圧倒的多数でドゴール憲法を拒否した」（毎、

10月3日)。「プロフィール ギニア共和国の初代首相 セクー・トーレ
 ともかくトーレ首相は“金持なドレイになるよりは、貧しくとも自由な人
 間になる”ことを選んで独立を達成しただけに、その行手にきびしい道が
 横たわっていることは彼自身が一番よく知っているだろう」(毎、10月8
 日)。

フランス共同体への参加を承認したフランス領の海外領土はフランス共
 同体内での「独立」(自治)国になった。マダガスカル(10月14日)、スー
 ダン(11月24日)、セネガル(11月25日)、モーリタニア(11月28日)、コ
 ンゴ(11月28日)、ガボン(11月28日)、チャド(11月28日)、ウバンギ・
 シャリ(12月1日)、象牙海岸(12月4日)、ダホメ(12月4日)、オート・ボ
 ルタ(12月11日)、ニジェール(12月18日)である。フランス共同体内で
 の「独立」国は自治国であり独立国ではない。独立国への移行は1960年にな
 る。共同体構想は植民地支配の短期延命策にすぎなかった。なお国連信
 託統治領では仏領トーゴランドが1960年の独立を認められた。

アフリカ大陸規模の国際会議が開催され、パン・アフリカの運動が前進
 した。ガーナのエンクルマ首相はアフリカ植民地の独立運動を牽引し、独
 立諸国間の協力を促進し、さらに「アフリカ合衆国」を目指すパン・アフ
 リカニズム運動においてイニシアティブを発揮した。4月にはアフリカ諸
 国会議、12月には全アフリカ諸国民会議が開催された。

アフリカ諸国会議は4月15日にアクラで開催された。8カ国の首脳が参集
 した。「アフリカ8カ国会議開く [アクラ(ガーナ)15日発UP] アフ
 リカの独立国ガーナ、アラブ連合、エチオピア、リベリア、リビア、モ
 ロッコ、スーダン、チュニジアの8カ国首脳は15日、アクラのガーナ議
 会に参集、一週間にわたるアフリカ諸国会議の幕を開いた。エンクルー
 マ・ガーナ首相は開会に当たり「この会議は数世紀にわたるアフリカ史上、
 最も重要なものとなるものと信ずる」と述べた」(毎、4月16日)。

全アフリカ諸国民会議は12月8日にアクラで開催された。政界・労組代

表約300人が集まった。5つの委員会で議論した。会議は1960年が植民地主義の終わりが始まる年になることを明言し、「アフリカ合衆国」を目指し全アフリカ解放に向けた大陸的規模の国際機関の設置を決定した。「解放の新戦術編み出す エンクルマ首相が開会演説 [アクラ（ガーナ）8日発＝UPI] エンクルマ・ガーナ首相は全アフリカの解放を要求…次のように述べた。ガーナの独立はアフリカの解放に結びつけられなければ無意味である。我々はこの最終目標が達成され植民地主義と帝国主義の最後の名残りが、このアフリカ大陸から取り去られるまでこの立場（全アフリカの解放）を守るだろう。本会議は我々の目的を達成するための新しい戦略戦術を編み出すべきである」（毎、12月9日）。

北アフリカと東アフリカで民族主義者の会議が開催された。北アフリカ民族（主義者）会議は4月27日にタンジールで開催された。「主権・独立の権利宣言 アルジェリア問題 北アフリカ会議決議 [タンジール30日発＝AFP] タンジールで開かれていた北アフリカ民族会議は、最終日の30日最終決議を採択した。決議の要旨つぎの通り。一、チュニジア、モロッコ両国政府と協議の後アルジェリア政府を設立することを勧告する。…一、アルジェリア民族解放戦線（FLN）は、アルジェリア唯一の代表と考える」（朝、5月1日）。

東アフリカ民族（主義者）会議は9月（17日あるいは16日）にムワンザで開催され、19日に「汎アフリカ自由運動」を結成した。「北（東）アで反英自治運動 20日夜の北京新華社電がムワンザからの報道として伝えるところによれば、北タンガニカのムワンザで会議を開いていたウガンダ、タンガニカ、ニアサランド、ケニア、ザンジバルなどアフリカ5英領の政治指導者21人は19日声明を発表、東アフリカと中部アフリカの「汎アフリカ自由運動」を結成したことを明らかにした。この運動の目的は帝国主義と闘うことにあり、声明では全アフリカに民主的な自治政府を作る希望を述べている」（毎、9月21日）。この年、東アフリカの民族主義運動の動静

は日本では全く報道されなかった。しかし各地で運動は継続されていた。その一端が新華社電を引用して伝えられたのである。この会議は東アフリカの民族主義運動において重要な役割を果たした。「東部・中部・南部アフリカのパン・アフリカ自由運動」(PAFMECSA = Pan-African Freedom Movement for Eastern, Central and Southern Africa)は1958-1963年に活動した(UNESCO, *General History of Africa*, Vol.VIII, 1993, p.748)。一般にはPAFMECSAと呼称されている。ムワンザ会議を主導したのはタンガニーカの民族主義組織、タンガニーカ・アフリカ人民族同盟(TANU)幹部のジョセフ・ハミシとボケ・ムナンカであった。中国の新華社電はアフリカの民族主義運動の活動を紹介したので、ヨーロッパ(植民地宗主国)のメディアの報道との視点の相違が鮮明になった。

アフリカで「最初」のクーデターが発生した。それは1958年11月のスーダン・クーデターである。スーダンでは1956年1月の独立以降、親アラブ派と親西欧派が対立していた。親アラブ派のアブードが親西欧派のハリルをクーデターで打倒したと解説された。「スーダンでクーデター 軍部が政権 “親アラブ”を表明 [カイロ17日発UPI] スーダン陸軍司令官イブラヒム・アブード中将は17日クーデターを起こし、親西欧のアブドゥラー・ハリル現政府から政権を奪った」(毎、11月18日)。

日本人新聞記者の活動では西日本新聞の先川祐次記者がアフリカ諸国を訪問し記録映画を製作したことが注目される。先川祐次記者は1958年2月19日にアフリカに派遣された。「社会部記者先川祐次をアフリカへ派遣」(『西日本新聞戦後小史』西日本新聞社、1962年4月、165頁)。エチオピアのハイレ・セラシエ皇帝からの要請で日本人女性3人がエチオピアに渡っていた。その一人(福本昭子)が福岡市の出身であったので、その取材が出発点であった。先川祐次は16ミリの映画用カメラを持ち込んだ。約半年間、アフリカ各地を取材した。帰国後、記録映画「新しいアフリカ」(あるいは「新しきアフリカ」)が編集・製作され、学校教育に利用された

（『西日本新聞』2018年8月3日）。アフリカ大陸紀行記として先川祐次『アジア・アフリカとびある記』（全国地方銀行協会、1962年9月）が刊行された。その後半「新しい大陸アフリカ」によれば、訪問国はエチオピア、ケニア、ウガンダ、タンガニーカ、南アフリカ、ガボン等である。先川祐次は「むすび」においてヨーロッパの先進国とアジア・アフリカの後進国の間にある支配者と被支配者の関係（ギャップ）に言及し、日本の位置の重要性を強調した。「こうしたギャップを埋めてやる中間的存在として日本はうってつけの役割りを演じることができると思うのです」（69頁）。

アフリカ情勢全般の解説では「世界の鼓動（50）サハラ開発とフランス」（朝、2月6日）、「独立闘争へ強い刺激 成功だったアフリカ会議」（朝、4月24日）、「全アフリカ会議の意義 民族独立へ意気結集」（朝、12月7日）等が注目される。

日本のアフリカ研究の先頭を切り拓いたのは今西錦司と伊谷純一郎のゴリラ研究であった。日本モンキーセンターは1958年2-5月にゴリラ学術調査隊（今西錦司と伊谷純一郎）をアフリカに派遣した。最後の訪問地、カメルーンでの調査の記事が『毎日新聞』（6月8日）に掲載された。写真はゴリラばかりでなく市民の生活も活写していた。

映画では「百獣の王ライオン」と「アフリカ横断」があった。「百獣の王ライオン」は「ディズニーが描く真実のアフリカのドラマ」として1月15日にロードショー公開された。「文部省選定」。林寿郎（上野動物園飼育課長）は「後世にのこる貴重な文化財」と絶賛した。「アフリカ横断」は6月2日から封切された。『朝日新聞』（5月31日）は一頁大の広告を掲載した。「赤道直下一万軒 日映スコープ 総天然色 アフリカ横断 猛獣と野生動物の生態！ 珍奇な黑人風俗！ 絢爛豪華な大自然の姿！ フランキーのユーモラスな解説で、サア夢の冒険旅行へ」。「文部省選定」。映画評は「日本の記録映画として準佳作の上」（Q「解説で得をする」）であった。

2-1 論文と著書

論文

内田勝敏（ロイブッシャー著書の紹介）「イギリスの対植民地商品買付制度」『アジア問題』8巻1号、1958年1月、110-115頁。「カイロ 日本貿易斡旋所」；「中近東アフリカ 概観」；青木調査員「モロッコの思い出」；岡本調査員「ラゴスの正月」『海外市場』8巻75号、1958年1月、4-11、46-49、64-65、74-75頁。樫山利忠「アフリカの労働運動」『海外事情』6巻1号、1958年1月、54-58頁。「ガーナからの通信」；「ナイジェリア」；T・L「岐路に立つタンガニカ」『月刊自由労連』3巻1号、1958年1月、23-25、26-28、29-32頁。「ガーナの経済素描」『地理』3巻1号、1958年1月、138-139頁。G・H・T・キムブル「ローデシア・ニヤッサランド連邦」『新地理』6巻3号、1958年1月、68-73頁。佐藤伸雄「革命後のエジプトの教育について聞く——エジプト文化使節団を迎えて——」『歴史・地理教育』5巻1号、1958年1・2月、83-85頁。新谷洋二「エチオピアのアジス・アベバの都市計画」『新都市』12巻1号、1958年1月、26-28頁。対談（関根吉郎・高須茂）「早稲田大学赤道アフリカ遠征隊」『岳人』117号、1958年1月、16-18頁。鶴嶋雪嶺「N.M.Robertson's "South Africa—economic and political aspects"」『關西大學經濟論集』7巻7号、1958年1月、102-121頁。永島「海外市場調査（英領東・中央アフリカ）」『調査時報』（日本化学繊維協會）109号、1958年1月、1-66頁。南平正治「アフリカの主要繊維市況」『帝人タイムス』28巻1号、1958年1月、38-42頁。西野照太郎「日本におけるアフリカ研究」『歴史評論』92号、1958年1月、46-52頁。J・G・ハビブ「エジプトの医薬品事情」；「コンゴの対日貿易」『海外貿易情報』104号、1958年1月、9-12、8頁。荒木吉治「ニジェリア向けの客車」『日本機械学会誌』61巻469号、1958年2月、65頁。飯島正義「エジプトの宗教について」『世界史研究』17号、1958年2月、40-43頁。伊谷純一郎「類人猿に挑む JMCアフリカ探検計画」『モンキー』2巻4号、1958年2月、12-13頁。

岩田慶治「アフリカ——アフリカ文化の歴史的展望——」森鹿三・織田武雄編『歴史地理講座 第2巻 アジア・新大陸』朝倉書店、1958年2月、300-314頁。H「チュニジア爆撃の背景」『エコノミスト』36巻8号、1958年2月、12-13頁。在レオポルドヴィル領事館「ベルギー領コンゴの経済及び貿易情勢」『海外経済事情』8巻4号、1958年2月、24-26頁。「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻76号、1958年2月、41-45頁。西野照太郎「中東・アフリカ」『国際政治』4号、1958年2月、85-96頁。羽山忠弘「エジプト監獄視察の記（Ⅰ）（Ⅱ）」『刑政』69巻2号、1958年2月、74-77頁；69巻3号、1958年3月、86-88頁。藤城博「国際問題へ発展するかチュニジア問題の総まくり」『時事通信 時事解説版』3692号、1958年2月、2-6頁。松本和夫（男）「アルジェリア視察日記」『国連評論』37巻2号、1958年2月、34-46頁。「アルジェリア問題」；「西アフリカとの経済協力」；「エチオピアとの友好条約の締結」；「移動大使の派遣」『わが外交の近況昭和33年3月』外務省、1958年3月、27-29、79-80、93、162-163、152頁。今村陽次郎「仏領スーダンの開発」『資源』63号、1958年3月、22-24頁。岡淳平「エジプトのセメント工業」『セメント・コンクリート』133号、1958年3月、35-39頁。「カイロ 日本貿易斡旋所」；臼井調査員「ナイロビ」；荒調査員「ラゴス」；「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻77号、1958年3月、4-9、9-12、12-14、50-52頁。加藤一朗「先史時代末期のエジプトに関する覚書」『關西大學文學論集』8巻4号、1958年3月、83-96頁。河「迫るアルジェリアの決戦 仏、新油田に興廃かける」『世界週報』39巻12号、1958年3月、37頁。L.グカスヤン「アメリカのアフリカへの膨張（Ⅰ）（Ⅱ）」『世界情勢旬報』354号、1958年3月、16-20頁；355号、1958年4月、20-24頁。小林淳宏「裏側からみたチュニジア紛争」『世界週報』39巻10号、1958年3月、69-73頁。Chuzo Kondo（近藤忠三），“A Geological and Geoelectrical Investigation of the Filowoha Hot Springs in Addis Ababa, Ethiopia,” *Report of Research Institute Underground Resources*,

Akita University, No.19, March 1958, pp.20-41. ジャファール「国際的問題 アルジェリア」；「アルジェリアにおける労働組合の権利の侵害」；ジャック・ウォデイス「一日一ポンドを 南アフリカ」『世界労働組合運動』188号、1958年3月、22-26、26-28、36-38頁。鈴木正四「エジプトにおける民族革命の発展」今中次麿他編『政治権力の諸問題 小岩井 浄教授還暦記念論文集』合同出版社、1958年3月、252-286頁。「スーダンの輸入制限」『世界情勢旬報』353号、1958年3月、12頁。「日本品に対する海外の批判——エチオピア・モロッコ——」『海外貿易情報』94号、1958年3月、12-13頁。長谷川信彦「アラブ連合共和国と貿易」『外国為替』183号、1958年3月、9-11頁。「北阿における二つの紛争」『世界の動き』73号、1958年3月、32-35頁。村田良次「北阿経済開発の背景と底流」『エコノミスト』36巻10号、1958年3月、28-32頁。矢内原勝「西アフリカ・マーケティング・ボード下のココア買付機構の研究」『経済学年報』1号、1958年3月、128-197頁。伊谷純一郎「アフリカ探検便り」『モンキー』2巻6号、1958年4月、14頁；2巻7号、1958年5月、14頁；2巻8号、1958年6月、14頁。岡本昌雄「化繊市場としてのナイジェリア」『化繊月報』11巻4号、1958年4月、19-23頁。トム・オブライエン「夜明け前の暗黒大陸 南アフリカ労働者の実情」『月刊自由労連』3巻4号、1958年4月、23-29頁。アブデラーマン・キワン「アルジェリア民族運動の歴史と現状」『自由と正義』9巻4号、1958年4月、54-57頁。定金右源二「エジプト学のあけぼの」『歴史教育』6巻4号、1958年4月、35-42頁。鈴木耿子「日本娘キリマンジャロ初登頂記」『婦人朝日』13巻4号、1958年4月、78-84頁。太壽堂鼎「西南アフリカの国際的地位」『法學論叢』64巻1号、1958年4月、88-112頁。谷口昇「エジプトO/A廃止決定までの道」『外国為替』185号、1958年4月、35-40頁。「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻78号、1958年4月、41-44頁。矢内原勝「西アフリカ・マーケティング・ボードの安定政策と基金」『三田学会雑誌』51巻4号、1958年4月、35-53頁。「新しい自治領（ドミニ

オン）ガーナ』『海運』368号、1958年5月、85-88頁。「アフリカ諸国との関係」『情報メモ』181号、1958年5月、4頁。「アフリカの原住民——早大遠征隊のお土産ルボ——」『アサヒグラフ』1761号、1958年5月、24-27頁。「アルジェリアの鉄道」『外国交通調査資料』12巻5号、1958年5月、31-36頁。川口寅之輔「エチオピアが待っている」『日本』1巻5号、1958年5月、88-92頁。「北アフリカの実情」『月刊自由労連』3巻5号、1958年5月、15-20、24頁。エリ・グルハーレフ「アルジェリア・チュニジア・モロッコの世界＝経済的発展」『研究資料』（社会主義政治経済研究所）2巻5号、1958年5月、33-47頁。五島忠久「アフリカ土人の言語」遠藤嘉基他編『コトバと人間』（コトバの科学 第1巻）中山書店、1958年5月、209-220頁。「昨年のエジプトとの貿易」『海外貿易情報』96号、1958年5月、7-9頁。佐藤功・清水陸「アラブ連合共和国暫定憲法」『法律時報』30巻5号、1958年5月、82-87頁。島久代「世界の焦点アフリカ」『世界経済』13巻5号、1958年5月、54-63頁。関次省三「アフリカ市場みて歩き」『輸出綿糸布月報』8巻5号、1958年5月、16-18頁。「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻79号、1958年5月、9-13頁。「チュニジア問題の波紋」『世界』149号、1958年5月、119-123頁。「つかむか収拾のチャンス アルジェリア反乱のあとさき」『時事通信 時事解説版』3769号、1958年5月、2-6頁。T「アフリカにおける二つの歴史的な会議」『世界情勢旬報』359号、1958年5月、13-15頁。アブドラヤ・ディアロ「アフリカ労働組合の反植民地闘争を発展させるために」；E.R.ブレイヴァマン「反撃をくう新労働組合反対条令」；フランソワ・パオリ「チュニスからカイルアンへ」；デスモンド・バックル「たちあがるウガンダ労働者」『世界労働組合運動』165号、1958年5月、28-31、31-33、34-38、38-39頁。西野照太郎「鎖をときはなす黒人」『世界週報』39巻21号、1958年5月、38-44頁。西野照太郎「南ア連邦の総選挙」『世界週報』39巻20号、1958年5月、38-42頁。「日本国政府とモロッコ王国政府との間の貿易協定」『通産省公報』2564号、1958年5月、2頁。野村昭

夫「フランスの政変とアルゼリア問題」『世界情勢旬報』358号、1958年5月、11-14頁。林田重男「「アフリカ横断」撮影記」『週刊朝日』63巻20号、1958年5月、18-19頁。原哲哉「南ア連邦の繊維事情」『化繊月報』11巻5号、1958年5月、66-70頁。藤島宇内「沖縄とアルジェリア」『中央公論』73年5号、1958年5月、150-157頁。横山正幸「エチオピア国との経済協力」『経団連月報』6巻5号、1958年5月、39-41頁。吉岡次郎「ゆきづまるアルジェリア問題」『教育』8巻5号、1958年5月、73-75頁。アンドルー・ロス「ファシズムがフランスにしのびよる——アルジェリアは「満州」か——」『世界』149号、1958年5月、93-95頁。「アフリカ諸国」『通商白書 日本貿易の現状 各論 昭和33年』通商産業省、1958年6月、378-404頁。「アフリカの黄金都市チンブクツ」；「サハラ砂漠横断」綿谷雪『世界の秘境』春陽堂書店、1958年6月、63-77、79-95頁。「アフリカの政治地理事情」岩田孝三『政治地理』帝国書院、1958年6月、304-309頁。ジャック・ウオーデイス「アフリカ労働組合運動の新局面」『国際資料』47号、1958年6月、16-20頁。宇野博他「危機に立つフランス アルジェリア紛争の背景」『週刊朝日』63巻24号、1958年6月、3-11頁。H「アフリカ独立諸国会議」『前衛』141号、1958年6月、40-42頁。「エジプト国有鉄道5カ年計画」；「サハラ縦断鉄道の建設」『外国交通調査資料』12巻6号、1958年6月、11-23、24-26頁。Q「解説で得をする『アフリカ横断』」『週刊朝日』63巻25号、1958年6月、71頁。在レオポルドヴィル領事館「一九五七年のベルギー領コンゴの外国貿易状況」『海外経済事情』8巻12号、1958年6月、25-31頁。佐藤功「ナセルの憲法（上）（下）」『時の法令』282号、1958年6月、42-47頁；283号、1958年6月、35-41頁。杉谷好一「ルクソール・アスワンの旅」『宗教公論』28巻6号、1958年6月、21-23頁。寺本光朗「新段階に入つた北アフリカ情勢」『世界情勢旬報』362号、1958年6月、6-9頁。戸崎義郎「カサブランカの印象」『産業と科学』3号、1958年6月、80-83頁。永田脩一「ベムバ族の政治体系について」；村武精一「アフリカ諸種族の

政治組織類型について』『社会人類学』1巻2号、1958年6月、53-59、43-52頁。西野照太郎「アフリカにおける植民政策」『世界週報』39巻23号、1958年6月、56-62頁。西野照太郎「アフリカの独立運動と植民地政策の二つの型」『経済時代』23巻6号、1958年6月、76-79頁。西野照太郎「アルジェリアの地方行政」；S・K「立上るアフリカ諸国」；「北阿対策のブレーン フランス国務相＝ウフーエ・ボワニ」『世界週報』39巻25号、1958年6月、28-29、37-40、20頁。カマレシュ・バネルジー「アルジェリア反乱の40ヵ月」『世界』150号、1958年6月、265-273頁。藤島泰輔「アフリカの紳士淑女たち」『サンデー毎日』37巻23号、1958年6月、92-93頁。降幡調査員「エジプトの石油事情」；「中近東アフリカ 概観」；荒調査員「西アフリカ最初の日本人技術者」『海外市場』8巻80号、1958年6月、27-34、57-62、78-79頁。ジャン・ブレジャン「チュニジアの農業問題」；「アルジェリアの戦争」『研究資料』（社会主義政治経済研究所）2巻6号、1958年6月、77-100、74-76頁。青木平八郎「モロッコの印象」『名古屋商工会議所月報』181号、1958年7月、24-26頁。「アフリカ」東京銀行調査部『対スターリング地域貿易の考察』（東銀調査資料17号）東京銀行、1958年7月、10-15頁。「アフリカ諸国の二つの会議」『世界』151号、1958年7月、155-159頁。荒調査員「ボルヌ借款とナイジェリア開発計画」；「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻81号、1958年7月、12-15、39-41頁。大野栄三郎「国連チュニジア討議のあと味」『世界週報』39巻29号、1958年7月、40-43頁。「海外市場調査（アフリカ総括編）」『調査時報』（日本化学繊維協会）113号、1958年7月、1-95頁。ロベール・ギラン「アルジェリアは第二の満州か」『文藝春秋』36巻7号、1958年7月、84-95頁。高野雄一「アフリカの国々と世界」；西野照太郎「アフリカの政治情勢について」；矢内原勝「新独立国ガーナの経済課題」；戸代広「ガーナの独立政治とその基盤」；中村弘光「ガーナ経済構造の特質」；新国民外交調査会研究室「ドゴールのアルジェリア対策と民族解放戦線の反撥」；アフリカ学会「アフ

リカ関係文献解題」：小松清「北アにかかるフランスの運命」『外交季刊』3巻3号、1958年7月、2-15、16-25、36-46、47-54、54-60、69、70-73、79-86、95-113頁。「中南部アフリカ国際技術援助機構」『レファレンス』90号、1958年7月、90頁。「ナイジェリアのゴム」『ゴム』5巻7号、1958年7月、6-13頁。西野照太郎「北アフリカのナショナリズム」『国連評論』37巻7号、1958年7月、8-15頁。「ローマからエジプトへ」「古代エジプトの祕史」吉井豊藤丸『欧州とエジプトの旅』有信堂、1958年7月、146-151、152-179頁。臼井孝「英領東アフリカの化繊事情」『化繊月報』11巻8号、1958年8月、35-38頁。臼井孝「東アフリカ（英領）というところ」『名古屋商工会議所月報』182号、1958年8月、21-23頁。臼井調査員「東アフリカとインド人」；「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻82号、1958年8月、77-78、55-59頁。江口朴郎「ド・ゴールとアルジェリア」『歴史学研究』222号、1958年8月、24-27頁。「エジプト」～「リベリア」外務省編『アジア読本』外務省、1958年8月、172-232頁。アーサー・A・オチワダ「アフリカの労働運動」『月刊自由労連』3巻8号、1958年8月、17-21頁。加藤三之雄「アルジェリア問題とドゴール政権」『太平洋問題』53号、1958年8月、1-6頁。近藤忠三「エチオピア事情寸描」『秋田地学』4号、1958年8月、21-26頁。島久代「南ア連邦の人種問題」『世界経済』13巻8号、1958年8月、50-56頁。角倉一、川瀬清、木暮隆「スーダンにおけるアラビアゴム生産の近況について」『生薬学雑誌』12巻2号、1958年8月、91-95頁；『東京薬科大学研究年報』8号、1958年12月、59-63頁。角倉一、川瀬清、木暮隆「日本市場におけるアラビアゴムについて（1）」『生薬学雑誌』12巻2号、1958年8月、89-90頁；『東京薬科大学研究年報』8号、1958年12月、57-58頁。関根吉郎「赤道アフリカに行く」『科学朝日』18巻8号、1958年8月、57-63頁。対談（辻村太郎・戸谷洋）「赤道直下一万軒「アフリカ横断」」『地理』3巻8号、1958年8月、176-182頁。辻政信「ナセル大統領閣下御許へ」；下中彌三郎「ナセルの印象」『週刊読売』17巻36号、1958年8月、58-63、96-97頁。西（龍法 '19）52-3、204（866）

野照太郎「アルジェリアの民族解放戦線——F・N・Lの性格と発展——」；アンドルー・ロス「陰謀は誰にも妨げられなかった」「アルジェの陰謀者は結集する」『世界』152号、1958年8月、100-104、111-116、116-129頁。西野照太郎「植民地ナショナリズムの理論」『アジア・アフリカ評論』8号、1958年（8月とする）、1-6頁。橋本武男「ドゴールとたたかうアルジェリア」『前衛』143号、1958年8月、45-49頁。横正「アフリカをめぐる諸問題」『自警』40巻8号、1958年8月、60-63頁。天沼紳一郎「Rand金鉱業について（上）（下）」『資源』69号、1958年9月、10-14頁；70号、1958年11月、63-67頁。「アルジェリア臨時政府の樹立」『国際週報』497号、1958年9月、15-19頁。伊谷純一郎「アフリカにゴリラをおって」『中学二年コース』2巻6号、1958年9月、184-187頁。伊谷純一郎「ケニア（アフリカの動物たち 1）」；「タンガニカ（アフリカの動物たち 2）」；「ウガンダ 1（アフリカの動物たち 3）」；「ウガンダ 2（アフリカの動物たち 4）」；「ウガンダ 3（アフリカの動物たち 5）」；「ウガンダ 4（アフリカの動物たち 6）」；「ウガンダ 5（アフリカの動物たち 7）」；「ウガンダ 6（アフリカの動物たち 8）」；「コンゴ 1（アフリカの動物たち 9）」；「コンゴ 2（アフリカの動物たち 10）」；「コンゴ 3（アフリカの動物たち 11）」；「コンゴ 4（アフリカの動物たち 12）」；「コンゴ 5（アフリカの動物たち 13）」；「コンゴ 6（アフリカの動物たち 14）」；「コンゴ 7（アフリカの動物たち 15）」『モンキー』2巻10・11号、1958年8-9月、4-7頁；2巻12号、1958年10月、3-5頁；2巻13号、1958年11月、3-4頁；3巻15号、1959年1月、4-5頁；3巻16号、1959年2月、12-13頁；3巻17号、1959年3月、3-4頁；3巻18号、1959年4月、12-13頁；3巻19号、1959年5月、5-6頁；3巻21号、1959年7月、5-6頁；3巻22号、1959年8月、11-12頁；3巻23号、1959年9月、11-12頁；3巻24号、1959年10月、3-4頁；3巻25号、1959年11月、12-13頁；3巻26号、1959年12月、3頁；4巻27号、1960年1月、4頁。今西錦司「アフリカ第一次探検」；座談会（今西錦司・伊谷純

一郎・河合雅雄・深井正敏)「海拔4,000メートル マウンテンゴリラ探検」『モンキー』2巻10・11号、1958年8-9月、3、17-18頁。臼井調査員「ナイロビからカンパラ」；「ジエトロ海外施設の紹介 (3) カイロ 日本貿易斡旋所」；「中近東アフリカ 概説」『海外市場』8巻83号、1958年9月、93-95、96-98、59-63頁。桂ユキ子「バンバリ村の一夜」『婦人公論』43巻10号、1958年9月、222-226頁。在ナイロビ領事館「一九五七年東アフリカの対外貿易」『海外経済事情』8巻17号、1958年9月、25-28頁。新久保三郎「ナセルの横顔」『国連評論』37巻8・9号、1958年9月、36-39頁。辻政信「ナセル大統領会見記」『サンデー毎日』37巻36号、1958年9月、30-32頁。TEL「旧式な人種差別論者 ヘンドリク・フェルワールド」『世界週報』39巻38号、1958年9月、62頁。中岡三益「エジプト土地改革における地主保有制限」日本エカフェ協会『低開発諸国の土地問題』（『エカフェ資料』16号）1958年9月、153-185頁。「南阿連邦篇」「ローデシア及ニアサランド連邦篇」「ナイジェリア連邦篇」伊東敬『英連邦入門』表現社、1958年9月、228-267、452-482、501-529頁。西春彦「変貌するアフリカ」『国民』711号、1958年9月、32-58頁。西野照太郎「“一步前進”する仏領アフリカ」『世界週報』39巻37号、1958年9月、20-24頁。西野照太郎（書評）エルサダット「ナイルの叛乱」『週刊東京』4巻37号、1958年9月、78頁。藤島泰輔「アフリカひとり旅」『婦人生活』12巻9号、1958年9月、2-4頁。エドウィン・マラー「ブルギバの悲劇的なジレンマ」『リーダーズ・ダイジェスト』13巻10号、1958年9月、90-95頁。百々巳之助「アフリカ植民地の政治構造——英領東アフリカ植民地ケンヤの支配構造——」『民事法学の諸問題 (二) ——東博士古稀記念論文——』日本大学法学会、1958年9月、445-490頁。臼井調査員「東アフリカの自然動物園」；「アフリカ」；「中近東アフリカ概観」『海外市場』8巻84号、1958年10月、84-85、10-15、60-65頁。内田勝敏「植民地の輸出貿易とイギリス——西アフリカの植民地を中心に——」『国際経済』10号、1958年10月、233-241頁。内田勝敏「西アフリカ英植民

(龍法 '19) 52-3. 206 (868)

地における外国企業——「連合アフリカ会社」を中心にみたナイゼリアの商業——『経済研究』8号、1958年10月、64-87頁。「エジプト経済協力に思う」『外国為替』196号、1958年10月、21-23頁。木下広居「アルジェリアとフランス」『世界週報』39巻40号、1958年10月、42-43頁。在ラゴス領事館報告「ガーナの産業振興策」「ガーナの食糧品輸出禁止」『在外公館経済情報』1237号、1958年10月、1-6、17頁。座談会（竹山道雄、安倍能成、林健太郎、鈴木成高、高坂正顕、和辻哲郎）「アルジェリア問題と日本の現状」『心』11巻10号、1958年10月、26-48頁。鈴木「ウガンダ土壌の硝酸塩の集積」『日本土壌肥科学雑誌』29巻7号、1958年10月、44頁。「ド・ゴール首相のアルジェリア五ヵ年計画」『国際週報』500号、1958年10月、35-39頁。西野照太郎「独立した仏領ギニア」『世界週報』39巻42号、1958年10月、31-36頁。西山富夫（書評）ロバート・C・ウィリアムスン「南アフリカにおける犯罪」『名城法学』8巻2号、1958年10月、29-33頁。「二度目のナセル会談」「三度目のナセル会談」辻政信『動乱の眼 アジア・アラブの指導者と語る』毎日新聞社、1958年10月、36-48、48-54頁。ラルビ・ブハリ「アルジェリアはアルジェリア人のもの」『平和と社会主義の諸問題』1巻2号、1958年10月、63-65頁。「リビアの開発計画」『世界情勢旬報』373号、1958年10月、19-20頁。四十物秀蔵「エジプトの石油資源」『経団連月報』6巻11号、1958年11月、49-52頁。青山春雄「ギニアという国とその将来」『世界週報』39巻46号、1958年11月、58頁。「アルジェリア問題の推移」『国際週報』503号、1958年11月、22-29頁。今西錦司「ゴリラを追ってアフリカへ」『日本』1巻11号、1958年11月、172-177頁。「エジプトとの新貿易支払取極」『税関調査月報』11巻11号、1958年10・11月、65-69頁。「エジプトの驚異」村川堅太郎『地中海からの手紙』毎日新聞社、1958年11月、3-9頁。岡本昌雄「ガーナの化繊事情」『化繊月報』11巻11号、1958年11月、35-38頁。I・A・ザカリア「スーダンと民族独立問題」；エドソン・F・C・シトール「南ローデシアのアフリカ人労働者」『世界労働組

合運動』195号、1958年11月、12-14、18-21頁。「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻85号、1958年11月、50-56頁。TEL「トーゴ共和国の独立」『世界週報』39巻45号、1958年11月、44-47頁。TEL「マルガッシュ共和国」『世界週報』39巻44号、1958年11月、25-28頁。平田良「エジプトの農地改革に関する一試論」『研究年報経済学』48号、1958年11月、120-165頁。森永和雄「親ナセルか親西欧か スーダン政変のあと先」『時事通信時事解説版』3923号、1958年11月、2-4頁。「アルジェリアの民政復帰」『国際週報』509号、1958年12月、49-52頁。Kinji Imanishi (今西錦司), "Gorillas : A Preliminary Survey in 1958," *Primates*, Vol.1, No.2, December 1958, pp.73-78. カイロ・ジャパン・トレード・センター「アラブ連合エジプト地区 大型車から中小型車へ」；荒調査員「ナイジェリア 将来は中型車が中心」；「アジス・アベバ日本商品展 エチオピア風景」；「中近東アフリカ 概観」『海外市場』8巻86号、1958年12月、4-8、12-14、(頁なし)、53-57頁。K「サハラ石油と外国資本」『世界情勢旬報』380号、1958年12月、24頁。近藤忠三「エチオピアの地質と鉱産」『鉱山地質』8巻32号、1958年(12月)、39-45頁。I・A・ザカリヤ「カイロ会議 国際労働者階級とアルジェリア人民労働者との連帯」；「アルジェリア人民との連帯を」；「ギニア労働者への世界労連の挨拶」『世界労働組合運動』196号、1958年12月、11-12、13-14、14頁。「スーダンのクーデター」『世界の動き』82号、1958年12月、18-19頁。「チュニジアは“トロイの木馬”か」『世界』156号、1958年12月、148-151頁。T「ガーナ・ギニア合邦と経済問題」『世界情勢旬報』380号、1958年12月、25-26頁。TEL「勝利収めた組織力と雄弁 クワーメ・エンクルマ」『世界週報』39巻50号、1958年12月、61頁。寺本光朗「アフリカ諸国民会議」『世界情勢旬報』381号、1958年12月、20-23頁。寺本光朗「スーダンの政変」；「スーダンの綿花輸出の問題」『世界情勢旬報』379号、1958年12月、9-13、21-23頁。徳田戯二「赤い血で彩色されたアラブ民族の独立運動——仏領カメルーンの実状——」

『月刊総評』22号、1958年12月、72-76頁。西野照太郎「仏領アフリカの離反」『世界週報』39巻51号、1958年12月、22-26頁。

著書

アジア・アフリカ諸国民会議日本準備会編『アジア・アフリカ諸国民会議決議および決定集』日本アジア連帯委員会、1958年（1月とする）。J・コンラッド（中野好夫訳）『闇の奥』岩波書店、1958年1月。外務省欧亜局中近東課『北アフリカ三国の問題と現状』（欧七資料35号）外務省欧亜局、1958年2月。西野照太郎『変貌するアフリカ大陸』（国民外交シリーズ5号）国民外交調査会、1958年2月。J.A.ハンター、D.P.マニックス（川口正吉訳）『フロンティア 暗黒大陸に挑んだ人びと』三笠書房、1958年3月。アジア・アフリカ諸国民会議日本準備会編『カイロ会議 アジア・アフリカ諸国民会議記録 1957.12.26—1958.1.1』小川書店、1958年4月。日本繊維意匠センター『アフリカの繊維意匠』日本繊維意匠センター、1958年4月。農林水産業生産性向上会議編（解題＝小倉武一）『エジプトの農業改革』（のびゆく農業——世界の農政—— 37号）農林水産業生産性向上会議、1958年4月。ジョン・スコール（青木和夫譯）『青い種族』新潮社、1958年5月。日本アジア連帯委員会編『アルジェリア戦争』日本アジア連帯委員会、1958年（5月とする）。ペ・バラノフ（南信四郎訳）『アフリカの旅』ベースボール・マガジン社、1958年5月。外務省経済局スターリング課『スターリング地域経済事情 4 東アフリカ』；『同 5 西アフリカ』；『同 12 ガーナ』外務省経済局、1958年6月。マーチン・ジョンソン（藤原英司訳）『シンバ 百獣の王国タンガニカへ』白揚社、1958年6月。『日本国とエチオピアとの友好条約』（『条約集』第36集16巻）外務省条約局、1958年6月。平塚英吉『エチオピア国農業事情』（欧七資料41号）外務省欧亜局、1958年6月。山室静編『アフリカの民話』（世界の民話1）未来社、1958年6月。朝日新聞社編『エジプト』（アサヒ写真ブック74）朝日新聞社、1958年7月。外務省欧亜局中近東課『エチオピア親善使節団

報告』外務省欧亜局、1958年7月。外務省経済局経済調査室『モロッコ経済の基本調査』（在外公館調査報告6）外務省経済局、1958年7月。オサ・ジョンソン（本多喜久夫譯）『ウガンダ 私は冒険と結婚した』三笠書房、1958年7月。淡徳三郎『アルジェリア問題』理論社、1958年7月。林礼二『西アジア・アフリカ』（入江敏夫編『新しい世界の地理』第3巻）日本評論新社、1958年7月。朝日新聞社編『黒人 迫害と忍従を越えて』朝日新聞社、1958年8月。海外貿易振興会編『世界貿易事典 中近東・アフリカ編』日本経済新聞社、1958年8月。A・エル・サダット（井上幸治訳）『ナイルの叛乱——エジプト革命の記録——』岩波書店、1958年8月。日本繊維製品輸出組合『海外市場調査報告書 アフリカ 昭和33年3月』日本繊維製品輸出組合、1958年8月。藤島泰輔『アフリカ紀行』小山書店、1958年8月。ジャン・ミュレール（鈴木道彦他訳）『太陽の影 アルジェリア出征兵士の手紙』青木書店、1958年8月。P・イシャク（大塚幸男訳）『密林の狩猟者——赤道アフリカの神秘——』新潮社、1958年9月。鈴木耿子『キリマンジャロの雪』実業之日本社、1958年9月。百々巳之助『植民地に於ける議会政治の諸問題』有信堂、1958年9月。矢島文夫編『エジプトの民話』宝文館、1958年9月。早稲田大学赤道アフリカ遠征隊編『アフリカ横断一万キロ』朝日新聞社、1958年9月。アフリカ学会編『アフリカ学会々報』1巻1号、1958年10月（西野照太郎「ヘイレー卿“AN AFRICAN SURVEY”新版と旧版との比較」2-7頁；村武精一「アフリカ諸種族の政治組織類型に関する覚書（1）」8-14頁；国立国会図書館編「アフリカ関係文献目録（1）」15-20頁）。外務省欧亜局中近東課『エティオピア出張報告書』外務省欧亜局、1958年10月。日本大学国際研究所『現代のアフリカ』（国際研究所研究報告1号）日本大学国際研究所、1958年10月。早稲田大学赤道アフリカ遠征隊編『赤道のアフリカ——横断記録写真集——』朝日新聞社、1958年10月。外務省欧亜局中近東課『エティオピア国鉱物資源』（欧七資料43号）外務省欧亜局、1958年11月。経済企画庁調整局『最（龍法 '19）52-3, 210（872）

近のアフリカにおける経済上の諸問題』経済企画庁調整局、1958年11月。
ウィルフリッド・ロバートソン（能島武文訳）『少年・少女世界の旅 熱帯アフリカ編』保育社、1958年11月。神戸市経済局貿易課編『東アフリカ市場調査団報告書』神戸市経済局、1958年12月。日本大学国際研究所『アフリカ植民地の政治構造』（国際研究所研究報告2号）日本大学国際研究所、1958年12月。海外漁業協力会『ケニアの水産業』海外漁業協力会、1958年（月なし）。

2-2 文献と概説

日本政府はアフリカ外交を確立していなかった。外務省は外交青書『日本外交の近況 昭和33年3月』（第2号）を刊行した。アフリカは日本外交において位置づけがなかった。前年の外交青書（第1号）と同様、アジア関係、ラテン・アメリカ関係、中近東関係は項目とされたが、アフリカ関係の項目は立てなかった。アフリカ問題は植民地宗主国の管轄事項とされたのである。「西アフリカに対する経済協力問題」は「英連邦関係」の中で言及された（79-80頁）。「エチオピアとの友好条約の締結」は「中近東関係」の中で言及された（93頁）。

アルジェリア問題は「国際連合における活動」の中で取り上げられた。アルジェリア問題で、日本政府の努力は「アラブ諸国およびフランスの双方から高く評価された」（29頁）と自賛した。日本政府の国連外交はアルジェリア住民の独立の権利を武力で弾圧していたフランス政府から「評価」されたのである。外務省は民族解放戦線（FNL）が1958年9月19日に臨時政府を樹立した事実を確認していた（『国際週報』1958年9月23日）。しかし臨時政府への評価は懐疑的であった（『国際週報』1958年11月4日）。

当時、外務省はアルジェリア問題でフランス政府を支持していた。西春彦（前駐英大使）は「変貌するアフリカ」においてアルジェリアがフランスの領土であるとのフランス政府の主張を擁護していた。「フランスがア

ルジェリアを失ったら、結局、南の方の自国の領土との地理的なつながりが絶えるということも頭にあるので、あの問題に、非常に頑張りを見せているというわけではないかと思うのであります」(58頁)。西春彦(駐英大使)は1957年8-9月にアフリカ諸国を視察した。「私は昭和32年(1957年)8月、一カ月にわたりアフリカ大陸を飛行機でかけまわった。訪問国はナイジェリア、ガーナ、ベルギー領コンゴ、仏領赤道アフリカ、南ア、中央アフリカ連邦、ケニヤ、ウガンダ、スーダン、エジプトなどである」(西春彦『回想の日本外交』岩波書店、1965年4月、178-179頁)。西春彦はアフリカにおける民族主義の高揚を現認しながらアルジェリア問題ではフランス政府の弾圧政策を容認したのである。アルジェリアの民族運動に理解を示す論調が高まる中で、座談会(竹山道雄他)はフランスのアルジェリア植民地統治を支持した。

外務省と通商産業省は市場調査を実施した。外務省経済局は『スターリング地域経済事情』シリーズ(『4 東アフリカ』、『5 西アフリカ』および『12 ガーナ』)を1958年6月に刊行した。通商産業省『通商白書 日本貿易の現状 各論 昭和33年』は植民地の独立、民族主義の動向に注目した。「アフリカは植民地の独立があいついでいて、…これらの国々では民族意識がさかんで、現地人を中心とする貿易の優遇策がとられるなどさまざまな動きがみられるので、市場の維持発展のためにはこの新しい傾向に注意を必要とする」(380頁)。この指摘は外務省の曖昧な姿勢とは対照的である。

海外貿易振興会編『世界貿易事典 中近東・アフリカ編』はアラブ連合共和国(エジプト地区)、エチオピア、英領東アフリカ、南ア連邦、白領コンゴ、ナイジェリア、ガーナ、モロッコを紹介した。青木平八郎(海外貿易振興会名古屋支部、駐在員としてタンジールに1955年秋から2年間滞在した)は「モロッコの印象」において次のように回顧した。「私の着任当時(昭和30年秋)モロッコにあった日本人は三指を数えるにすぎなかつ

たが、漸く昭和31年秋カサブランカに日本領事館が開設され…両国の関係は一層緊密化している」（26頁）。日本化学繊維協会はアフリカ市場調査を実施し、永島「海外市場調査（英領東・中央アフリカ）」と「海外市場調査（アフリカ総括編）」を刊行した。両者ともに詳細な報告書である。日本繊維製品輸出組合は『海外市場調査報告書 アフリカ 昭和33年3月』を刊行した。

文化協力があった。エジプト文化使節団歓迎懇談会は1957年11月27日に日本アジア連帯委員会の主催で開催された。技術協力があった。荒調査員「西アフリカ最初の日本人技術者」はラゴスの日本人、鈴木二三二を紹介した。鈴木二三二は18カ月の滞在予定で（1958年）1月中旬にK貿易会社から派遣され、イコロド製陶工業で技術顧問となった。

研究者が派遣された。大瀬貴光博士（元福井県衛生研究所長）はWHO（世界保健機構）のマラリア専門家として1958年から1975年までエチオピアに滞在した（「諏訪兼位会員インタビュー」『アフリカ研究』86号、2015年1月、36頁）。近藤忠三（秋田大学学芸学部教授）はエチオピア政府から技術顧問として招聘され、1957年5月から12月までアデス・アベバに滞在し、ヒロハ温泉の地質を調査した。平塚英吉（農学博士、元農林省農業技術研究所長）は1957年10-11月にエチオピア親善使節団の一員となり『エティオピア国農業事情』（欧七資料41号）を執筆した。

日本人のアフリカ探検として広く注目されたのが早稲田大学赤道アフリカ遠征隊（隊長＝関根吉郎）の派遣であった。「この紀行は、早稲田大学赤道アフリカ遠征隊が、ケニアのモンバサからコンゴのレオポルドビルまで、アフリカの赤道付近を東から西へ、自動車二台で横断したときのものである。1957年の12月5日に神戸を出港、58年1月5日にモンバサ上陸、3月25日にレオポルドビル着。赤道下、八十日の生活記録でもある。…横断した地方は、東から英領統治のケニア、タンガニカ、ウガンダ、およびベルギー統治のルアンダ・ウルンデ、コンゴの各地で、自動車をはじめ、

いっさいを国産の装備で走りまわりながら、この間、アフリカの最高峰、キリマンジャロにも登った。…一行は早大助教授の関根吉郎、吉阪隆正、早大診療所の医師である杉山正、早大O・Bの大野正樹、後藤薫子、早大学生の川井勝義と鈴木耿子、日映新社のカメラマン林田重男、今村俊輔の九名であった」(「まえがき」『アフリカ横断一万キロ』)。

『アフリカ横断1万キロ』は関根、吉阪、杉山、後藤、今村の5名が執筆した。基本は「何でも見てやろう」の精神である。関根吉郎(隊長:早稲田大学理工学部助教授)は白人とアフリカ人の関係について結語で次のように言及した。「どうみても現在までのアフリカにおける白人と黒人の関係は、征服者と被征服者との関係だった。…白人の利益のために、アフリカをほしいままにしていたことを否定することはできない。アフリカおよびアフリカ人が、そういう関係のもとにおいて紹介されていたことも同様である。わたしどもははなはだ公平な立場に立てる役得があった。ヨーロッパ人に対しても、アフリカ人に対しても、征服者でも被征服者でもない対等な人間であったから」(204頁)。その後、関根吉郎『アフリカ横断ケニアからコンゴまで』(牧書店、1960年7月)が刊行された。同書は関根吉郎隊長が一人で執筆しているので用語が統一され読みやすくなった。『赤道のアフリカ——横断記録写真集——』が出版された。隊員たちはアフリカ遠征の経験を新聞、雑誌、著書等で報告した。

日本人はアフリカ諸国を訪問した。臼井孝(ジェットロ大阪本部調査部、前日本貿易振興会ナイロビ調査員)は一年半、ナイロビに滞在した。岡淳平(小野田セメントK.K.勤務)は1957年6月にカイロに到着した。桂ユキ子(画家)は1958年5月に仏領赤道アフリカ(ウバンギ・シャリ)のバンバリ村の病院を訪問した。川口寅之輔(明治大学工学部教授)は1957年6月にエチオピアを訪問した(川口寅之輔『金属を拓く』工業調査会、2002年4月、143-144頁)。戸崎義郎(静興貿易株式会社カサブランカ駐在員)は(1957年あるいは1958年)6月にカサブランカに入った。羽山忠弘(東

京地検検事）は1957年11月にカイロの監獄を視察した。松本和夫（男）（日本経済新聞社パリ特派員）は1957年7月、一週間、アルジェリアに滞在した。村川堅太郎（東京大学文学部教授）は1956年1月、一週間、カイロに滞在した。吉井豊藤丸（秩父セメント株式会社研究部長）はエジプトを訪問した。

藤島泰輔『アフリカ紀行』がある。1956年4月に『孤獨の人』で作家デビューし有名人となった青年作家のアフリカ紀行である。ケニヤ、タンガニカ、ナイル源流、ヴィクトリア湖、モンバサ、ウガンダ、ルーエンゾリを巡った。『週刊女性』（1958年2月9日）についての新聞広告では、藤島君はアフリカ探検を思い立ち21日羽田を出発、と紹介された。だとすれば、藤島の出国は1958年1月21日であったと推測される。「現地に於いて無秩序に記したノート」（「序」）である。途中で京都大学の今西・伊谷隊に同行した。「幸いに、私は京大の今西博士と同行したので、世人にはあまり経験のないゴリラとの対面を果たすことができた」（藤島泰輔「アフリカの紳士淑女たち」93頁）。

『外交季刊』（1958年7月）は充実したアフリカ政治経済特集号である。新国民外交調査会『外交季刊』編集委員であった高野雄一（東京大学法学部教授）が特集号の編集責任者であった。高野雄一「アフリカの国々と世界」は「国際政治の主体性を獲得しようとする大陸アフリカが、アジアにつづいてになう世界史的な課題」（14頁）を強調した。西野照太郎「アフリカの政治情勢について」はアフリカ全体の政治の動きを分析した。矢内原勝「新独立国ガーナの経済課題」は経済開発計画の財源が単一農産物の輸出に依存しているというジレンマを解析した。アフリカ学会「アフリカ関係文献解題」は主要文献を要領よく解説した。

西野照太郎「日本におけるアフリカ研究」はアフリカに対する日本における関心の変遷を跡付けた。昭和10年代、アフリカへの関心は欧米帝国主義の害悪史を暴露することが目的とされた。アフリカ人は野蛮人と扱われ、

アフリカは蕃族が住む「暗黒大陸」とされた。第二次世界大戦後、アフリカへの普通の関心が現れた。自著『鎖を断つアフリカ』が紹介され、アフリカ学会の成立が説明された。アフリカ・ナショナリズムへの考察を宣言した。「西欧」中心の従来の政治学の方法には限界があり、「非西欧」の政治を認識するためには地域政治、比較政治学の方法を導入する必要性があるとして次のように強調した。「アメリカの学会においても、アフリカは新しい研究対象であった。アメリカにおける「地域研究」Area Studyの発展は、そのアフリカ研究を急激に盛んにした。…日本でも…若い社会科学の学徒たちで、アフリカを研究対象とするものが、この頃からあらわれはじめたのである」(50頁)。「いわゆる「比較政治学」Comparative Politicsの出現が、その反省の成果であると考えられる。それは欧米の資本主義国家の政治のみを研究対象として、成立していた従来の政治科学をもってしては、異った経済体制を基盤とする「非西欧」non-west (non-west)の政治は、科学的に分析することが出来ないという認識に立っている。私もこの考え方には原則的に賛成である。西欧的な政治学の模倣に終始してきた日本の政治学も、アジア・アフリカのナショナリズムに直面して、同様な限界に突き当たざるを得なかったのである」(52頁)。1950年代末、日本における社会科学研究において、地域研究や比較政治学の方法論はまだ一般的ではなかった。西野照太郎の視座は先駆的であった。しかも西野照太郎は比較政治学の方法論の限界性を同時に認識していた。

研究者の論文としては次のものがある。内田勝敏（大阪府立大学助教授）「西アフリカ英植民地における外国企業——「連合アフリカ会社」を中心にみたナイゼリアの商業——」。鈴木正四（愛知大学法経学部教授）「エジプトにおける民族革命の発展」。太壽堂鼎（京都大学法学部助教授）「西南アフリカの国際的地位」。五島忠久（大阪大学教養部教授）「アフリカ土人の言語」。永田脩一（東京都立大学大学院博士課程）「ベムバ族の政治体系について」。村武精一（東京都立大学大学院修士課程）「アフリカ諸

種族の政治組織類型について」。百々巳之助（日本大学法学部教授）「アフリカ植民地の政治構造——英領東アフリカ植民地ケンヤの支配構造——」。矢内原勝（慶應義塾大学経済学部助教授）「西アフリカ・マーケティング・ボード下のココア買付機構の研究」、同「西アフリカ・マーケティング・ボードの安定政策と基金」。

著書では次のものがある。百々巳之助『植民地に於ける議会政治の諸問題』。日本大学国際研究所『現代のアフリカ』、同『アフリカ植民地の政治構造』。百々巳之助と日本大学によるアフリカ政治研究は最先端を切り拓いた。百々巳之助の研究作業を支えたのが浦野起央であった。「日本大学政治学修士浦野起央君の御協力をうけた。記して深謝の意を表したい」と『諸問題』の「はしがき」に記された。

翻訳では次のものがある。J・コンラッド『闇の奥』は名著である。A・エル・サダット『ナイルの叛乱』はエジプト革命の記録である。

概説書では林礼二『西アジア・アフリカ』が入江敏夫編『新しい世界の地理』（全5巻の第3巻）の第1回配本として刊行された。朝日新聞社編『黒人 迫害と忍従を越えて』において「アフリカの黒人たち」を執筆したのは奥野保男（朝日新聞外報部）であった。

アルジェリア問題についての著作が刊行された。日本アジア連帯委員会編『アルジェリア戦争』と淡徳三郎『アルジェリア問題』である。淡徳三郎は日本アジア連帯委員会事務局長であったので、前書の筆者も淡徳三郎であったと考えられる。その後、淡徳三郎はアルジェリア問題の専門家となった。ミュレール『太陽の影 アルジェリア出征兵士の手紙』が翻訳された。アルジェリア問題については多くの記事や解説が展開された。西野照太郎「アルジェリアの民族解放戦線」は民族解放戦線（FNL）の形成過程を詳細に整理し、FNLの性格を分析し、「FNLはすでにアルジェリアの一つの政治運動ではなく、実質的にはアルジェリア政府というべきであろう」（104頁）と結論づけた。1958年9月、民族解放戦線（FNL）は東京

に極東事務所を開設した。これが日本とアルジェリアの政治的関係の開始であった。

ギニアの独立は画期的であった。多くのフランス領アフリカ植民地はフランス共同体内での「独立」(自治)の道を選んだ。唯一、真の独立の道を選択したのがギニアであった。そのギニアも最初は共同体内の自治を目指していた。青山春雄「ギニアという国とその将来」は次のように示唆した。「独立したギニアはフランスとの共存を選び、今のところ平穏そのものであるが、“植民地”と“本国”という宿命的な因果関係は、口先で共同体といつても払拭し切れるものではない。…どうやらこの平穏は“嵐の前の静けさ”といった感じでしかない」(58頁)。真の独立を目指して、セク・トゥーレは困難な道を選択した。

エンクルマの「アフリカ合衆国」構想が提唱された。T「ガーナ・ギニア合邦と経済問題」はエンクルマの夢に言及した。「両国の合邦は‘ブラック・アフリカ’の民族主義指導者たるヌクルマ・ガーナ首相が唱道している‘アフリカ単一連合’形成の夢への基礎を築いたものであつたといえよう」(25頁)。全アフリカ諸国民会議はエンクルマの構想を明示した。寺本光朗「アフリカ諸国民会議」はエンクルマがアフリカ合衆国構想を提起したと理解した。「“アフリカ合衆国”構想には…まだ将来の夢であるかもしれない。だがこんどの会議でその原則だけでも前面におしだせたということとは暗示的な内容をもっている」(23頁)。

日本とアフリカの関係は1958年に新しい段階に入った。1958年は日本におけるアフリカ研究が開始された年となった。「日本におけるアフリカ研究は1958年に開始された。今西錦司と伊谷純一郎が霊長類研究をアフリカ大陸で1958年に開始したので、1958年は日本におけるアフリカ研究の誕生の年といわれている。アフリカに関する研究は1958年以前からも行われてきたけれども、霊長類研究の先進的位置と国際的意義からすれば、1958年が画期であることは確かである」(川端正久「日本アフリカ学会の創立と

アフリカ研究の揺籃』『アフリカ研究』86号、2015年1月、49頁）。

アフリカ学術調査は今西錦司と伊谷純一郎が1958年2月から5月まで「第1次ゴリラ学術調査」をケニア、タンガニーカ、ウガンダ、ルアンダ・ウルンディ、コンゴ、カメルーンで実施したのが始まりであった。日本モンキーセンターが二人——今西錦司（日本モンキーセンター所長、京都大学人文科学研究所講師）と伊谷純一郎（日本モンキーセンター研究員、京都大学教養部講師）——をアフリカに派遣した。伊谷純一郎は回顧した。「私が最初にアフリカ大陸を訪れたのは1958年のことだった。今西錦司先生と二人の旅で、…財団法人日本モンキーセンターから派遣され、目的は大型類人猿の生態学的な予備調査だった。…私たちの旅が少なくとも日本人によるアフリカにおける計画的な調査の最初だったといってよいように思う」（伊谷純一郎「アフリカとの三〇年」『伊谷純一郎著作集第6巻』平凡社、2009年8月、453頁）。今西錦司はインタビューに答えた。「東アフリカに約40日、ベルギー領コンゴに約25日、カメルーンに約25日、合計三ヵ月ほどアフリカにいたことになりますね」（今西錦司「アフリカ、そしてゴリラ」『地理』4巻1号、1959年1月、127頁）。二人は調査の開始とともに、自分たちの活動の内容を研究者に、一般の人々に、そして海外の研究者に、新聞・雑誌・研究雑誌等を通じて積極的に発信した。日本におけるアフリカ研究は今西錦司と伊谷純一郎の現地調査によって開始されたのである。